

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

# えくてびあん

7

〈EKUTEBIAN-VOL.5, JULY, 1988-EKUTEBIAN〉



まい ふらわあ

■ミヤマオダマキ

by 安永 達

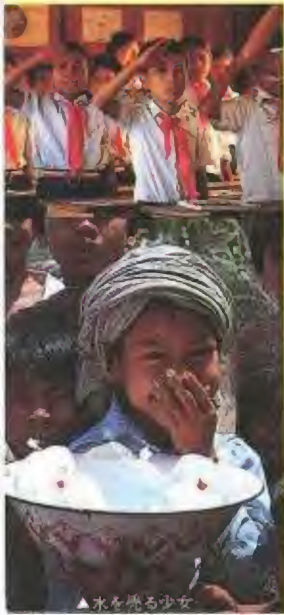




撮影・吉田義治

# 瞳のなかの ンペンノプ

ンペンノプ



▲水を売る少女

内戦の傷跡深く、入国も困難なカンボジア。ユニセフの使節の一員として、その姿を具さにカメラに収めた吉田義治氏の写真展が開催された。その一部を紹介しよう。見て下さい。子供たちの輝く瞳を。再建にかける人々の意気込みが伝わる「瞳のなかのンペン」。撮影したのが立川人というのも嬉しいじゃありませんか。



▲伝統楽器を奏でる人々



漢字テスト

形 熟  
同 読  
味

空欄に一字挿入を試みよ。

立川クイズ?

昔々、立川市は柴崎村と申しました。時代は移り明治11年、北多摩郡柴崎村となりましたが、わずか3年で立川村に改称します。なぜでしょう。

①北多摩郡に柴崎村が2つあった②立川氏の子孫で立川姓の人が多かった③立川の方が中央に知名度が高かった。  
【六月号の答え】①

立川市の向い側は西経40度35分、南緯35度41分の海です。

タイ パートナー 国際 人



タイのお寺の知り合ったのだから、さすがに仏教国です。エタイの知れな日本へお嫁にはやれないと周囲の反対が、誤解も偏見も言葉ものり見え、はや三年。

ナオミ 夫妻 神田



イギリス

ご夫妻は「明星学園」の英語の先生。なおみさんは英国から赴任してきた。「私、あんまり日本語うまくないネ」とはにかむ。ついご主人のイングリッシュに頼ってしまふとか。純日本風家屋にご主人のお母さんも干渉しつこなし。

アメリカ



神田英輔 夫妻 エリザベス 結婚して十六年になる。毎日が新鮮で、新鮮で、まるで新婚のよう。なひと言が返ってきた。英輔氏が米留学中に知り合ったという。エリザベスさん。スウェーデンで日本へ。アッパレ!



カナダ



フラン・ケヴィン 夫妻 中島 良子 フラン氏はアフリカ生まれ。人種差別反対の二親と共にヨーロッパの流浪の旅。その末にカナダに落ちつく。良子さんは富山の育ち。カナダへ移住。立川にはしげしの滞在後、イギリスへ。

エコハンドベルリンガーズ チャリティーコンサート'88

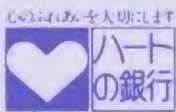
コンサートの収益金は「日本ユニセフ協会」を通じて世界の恵まれない子供たちへ渡されます。

6/25 開場 6:00PM (土) 開演 6:30PM  
立川市市民会館大ホール  
入場料 2,000円(前)

当日券あります

給与振込は「ハートの銀行」

全国約360か所の便利さを ご活用ください。



第一勧業銀行

主催 エコハンドベルリンガーズ チャリティーコンサート実行委員会  
後援 日本ユニセフ協会・立川市 立川市地域文化振興財団

お問い合わせ 0425-28-0082 えてびあん編集工房

同時開催 (両会場 5:30~)

写真展 「タツラのほのかな光」(天野武男) 「星のなかのブロンペン」(吉田真由)



指揮 ● 児玉勝己 演奏 ● エコハンドベルリンガーズ

児玉勝己さんがひきいるエコハンドベルリンガーズが、立川から「音楽の殿堂」カーネギーホールへの出演という朗報です。出演前に同じ曲目で「立川公演」があります。「天使のハート」を聴きにきて下さい。

真如苑だより

太陽の光が強くなってきました。子供たち待望の夏の到来です。汗をかき歩き回っている途中で、涼しい風が吹くとホッとしますね。暑さに疲れてしまったらちょっと一息身体も心も涼みにいらつしやいませんか?

日時 7月23日(土)

午後2時~4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。  
■立川市民(成人)に限りさせていただきます。  
■お申し込みは「えてびあん・コンパニオン」(本誌)を手渡ししてくれたい人へ。



「えくてびあん」の「工場から」は、ハンドベルという楽器を知らなかった方もおおいのではないだろうか。先月号の表紙で初めてご覧になったという方もまた。この楽器は一人ではメロディーすらもまならない。みんなの心が一つになった時、はじめて「天使のハート」が奏でられる。響け、世界へ! 吉田義治さんが写真展をひらいている。凡百のカメラマンと異なるのはユニセフを通して、世界の恵まれない子供たちへ、鋭い眼を向けていることだ。実は、と申すまでもなく「月刊えてびあん」は四周年をむかえた。どういうわけだかこの日本では「4」のお祝い事はバスすることが多いらしいので、心ある方は各自で祝ってあげてください。夕雲に木立ち色増すえてびあん。

写真展 天野武男・吉田真由

工場から

「ハンドベル」という楽器を知らなかった方もおおいのではないだろうか。先月号の表紙で初めてご覧になったという方もまた。この楽器は一人ではメロディーすらもまならない。みんなの心が一つになった時、はじめて「天使のハート」が奏でられる。響け、世界へ! 吉田義治さんが写真展をひらいている。凡百のカメラマンと異なるのはユニセフを通して、世界の恵まれない子供たちへ、鋭い眼を向けていることだ。実は、と申すまでもなく「月刊えてびあん」は四周年をむかえた。どういうわけだかこの日本では「4」のお祝い事はバスすることが多いらしいので、心ある方は各自で祝ってあげてください。夕雲に木立ち色増すえてびあん。

昭和三十三年 当時の午前七時から午前十時までの通勤ラッシュにおける混雑度は、新宿駅二五・三〇%増、秋葉原・御茶ノ水駅一八%増。東京駅に午前八時一五分、四〇分に到着する急行(現快速)は平均八十分程度遅れていた。事態を重く見た国鉄は宣伝カーを使い、時差通勤や一列動行を呼びかけるとともに、首都圏の定期券利用者三五〇万人の三割が通勤客であることから、都内の駅長を総動員して国電沿線の高校以上八二四校を歴訪、通勤時間帯の駅の混雑度や電車の遅れについて説明し、始業時間を繰り上げるなどにより混雑緩和に協力を請うなど、異例の措置が取られた。

立川駅長列伝 ① 中野 明



※写真は栗原駅長が贈った感謝状に対し、吉祥女子高校より贈られた御礼の花を生ける栗原駅長

その前年、昭和三十一年二月には通勤ラッシュ打開策として、新型の高性能電車モハ九〇型(現一〇一系)を投入したが、列車の長編成化や運転間隔の短縮化だけでラッシュを切り抜けるのはもはや限界であった。

き起こす恐れがあるとして、栗原駅長は地下通路の拡張工事を管理局へ要請、着工を促進した。また、これまで暫定的に行われていた青梅線との直通運転を、立川駅構内の線路配線の一部変更により、定期運行とした他、南武線の荷物輸送をトラックへ移行し、旅客電車の本数を増加するなど、輸送力増強に努めた。

資金を出し合い、殺風景な駅が少しでも美しくなるようにと、学校の行き帰りに花を付け続けられていたことを助役から聞かされた。(なんと、美しい心を持った生徒たちなのだ) 早速、栗原駅長は、この生徒たちに感謝状と記念品を贈った。栗原駅長は在任当時、既に、立川駅に駅ビルを建て民衆化を図ろうという計画が持ち上がった。地元の間心も高く、市議会の席上で説明を求められたこともあったという。

刊えてびあん 第48号  
昭和六十三年七月一日 発行  
発行所 えてびあん編集工房  
東京都立川市柴崎町2-4-11  
ファインビルディング 3F  
電話 0425-08082  
編集人 立井啓介  
発行人 沖野嘉男  
印刷所 株式会社立川印刷所



えくてびあん

# あーとさろん

○羽根田宏子さん(ソプラノ) 錦町  
牧野正人さん(バリトン)

オペラ、リサイタル、と多彩に  
活躍中。この夏、イタリアへ留学。

今月から、えくてびあんのアートサロンへ  
立川の芸術家たちをおよびしよう。第一回目は  
音楽畑で、それも声楽家ばかり。ソプラノ、  
アルト、バリトン、テノールと一流のノドが  
揃ってしまうあたり、わが立川も、なかなか。



○田口興輔さん(テノール) 環町  
日本で初めてのイタリアのテノールと称讃される。匠者も驚く声帯である。



○管家美保子さん(アルト) 柏町  
演奏は格調高く、聴き手は気楽に。そんな音楽会がいい、と。